

「秋の続きを」

—初稿—

2026/9/1

雨森 れに

〈人物表〉

尾崎 おざき 辰章 たつあき
(43) 会社員

尾崎 ふうと 風斗
(10) 辰章の息子

尾崎 ことね 琴音
(38) 辰章の妻

吉田 みのり
(73) 勝彦の家の隣人

尾崎 勝彦
(享年70) 辰章の父。4年前に他界
尾崎 詩織
(享年69) 辰章の母。5年前に他界

1.

勝彦の家・庭（夜）

激しい雨風。

伸び放題の雑草。散らばった落ち葉。

手入れされていない庭を、雨が叩いている。

その奥に、大きな柿の木。

太い枝が、風に大きく揺れている。

枝先には柿の実。

2.

辰章の家・リビング（夜）

マンションの低層階にある一室。壁には子供が書いた絵が数枚飾られている。

尾崎辰章（43）、カーテンをめくる。

窓に、飛ばされてきた枝がぶつかる。

琴音 「どんなかんじー？」

尾崎琴音（38）、ダイニングでお茶を飲んでいる。

辰章 「ヤバそう。明日、休もうかな」

琴音 「昼には台風行っちゃうれしいよ」

辰章 「んでも一応ね。念のため」

辰章、白々しく、

辰章 「休みたいわけじゃないんだけどさ」

琴音、吹き出す。

琴音 「しょーがないなあ。あ、そうだ」

辰章 「家のことは何でもお申し付けください、閣下」

と、執事のように一礼する。

琴音 「お義父さんの家、片付けてきなよ」

辰章 「えっ？」

辰章、顔をあげる。

スマホが鳴る。

琴音、画面を見て、

琴音 「学校も休みだって。だから風斗も一緒にさ」

辰章 「何も台風の後じゃなくても」

琴音 「台風の後だから、でしょ？」

琴音、有無を言わせぬ笑み。

辰章、言い返せない。

3. 勝彦の家・外観（昼）

小さな戸建てが並ぶ住宅街の一角。大きな柿の木が枝を伸ばし、隣家の敷地にも入り込んでいる。道路には、柿の葉と実が散らばっている。青い実に混じって、色づき始めた実もある。

4. 勝彦の家・前（昼）

辰章、門扉の鍵を開ける。

その隣で枝を持った尾崎風斗（10）が待っている。

隣家から吉田みのり（73）が顔を出す。

吉田 「たっちゃんじゃないの！」

辰章、驚いて振り向く。

辰章 「おばちゃん」

吉田 「何年ぶりよ。いつも琴音さんに任せっぱなしじゃない！」

辰章 「なかなか時間が取れなくて……あ。ほら、風斗、挨拶」

辰章、風斗を前に押し出す。

風斗、ハキハキと、

風斗 「こんにちは。尾崎風斗です」

吉田 「はい、こんにちは。吉田みのりです」

吉田、辰章を見る。

吉田 「大きくなっただねえ」

辰章 「はい。しかも、嫁に似て人見知りしないんですよ」

吉田、辰章の後ろを見て、しかめ面。

吉田 「そのお嫁さんは？」

辰章 「仕事です」

吉田 「じゃあ、たっちゃんと風斗ちゃんだけ？」

辰章 「はい。俺たち、休みなんです」

風斗 「掃除しにきました！」

風斗、枝を振り上げる。

吉田、につこり。

吉田 「連絡する前なんて偉いじゃない」

と、道路に散らばった柿の実を見る。

吉田 「今年もいっぱいよね」

辰章 「あの、ちゃんと綺麗にしますんで」

辰章、風斗の肩を抱く。

辰章 「ほら、行くぞ」

風斗、吉田に手を振りながら、

風斗 「またねー!」

吉田、手を振り返す。

5.

勝彦の家・庭（昼）

雑草の生い茂った庭。

縁側は開け放たれ、荷物が置いてある。

辰章、物置を開ける。

中は物で埋まっている。

草刈り機を引っ張り出す。

風斗、拾った実を縁側に並べている。

辰章、実を拾って、

辰章 「風斗（実を投げて）、パパのほうに来るなよ」

風斗 「はーい」

草刈り機を動かす。

× × ×

辰章、額に汗。疲れが隠せない。

草刈り機を物置に立てかける。

縁側前には、草や枝の詰まったゴミ袋。

風斗の前には、実のピラミッドができています。

辰章、実を拾って風斗に投げる。

風斗 「もういらなーい」

辰章 「じゃあゴミ袋に入れて」

風斗、ピラミッドを指さし、

風斗 「これも？」

辰章 「それもー」

風斗、柿の実をゴミ袋に入れていく。

辰章、風斗の隣に腰を下ろす。

風斗 「これ、持って帰ったら食べれる？」

辰章 「かじってみ」

風斗、柿をかじる。

顔をしかめる。

風斗 「まずい」

辰章 「干し柿にすればうまいんだけどな」

風斗 「これが干し柿になるの？」

辰章 「ほら、5年前に死んだばあちゃんいるだろ」

風斗 「うん」

辰章 「干し柿作りのプロだったんだよ。だから、おやつは毎日

干し柿

風斗 「毎日はやだなー」

辰章 「だろ」

辰章、汗を拭う。

立ち上がり、物置へ。

草刈り機を戻す。

奥に枝切りばさみを見つける。

手を伸ばすが、木箱に阻まれている。

辰章、木箱を引きずり出す。

中身はチェンソー。

辰章、柿の木を見る。

吉田 「ごめんくださいな」

風斗 「サンタクロースだ！」

吉田、実や葉の詰まったゴミ袋を背負って現れる。

辰章 「おばちゃん！ 何してるの！」

辰章、吉田からゴミ袋を受け取る。

吉田 「おせっかいしちゃった」

吉田、にやり。

吉田 「外は綺麗にしといたから」

辰章 「なんかもう、すみません」

吉田 「詩織さんと勝彦さんにはお世話になったからねえ」

吉田、汗を拭う。疲労の色が見える。

辰章、険しい表情。

辰章 「でも、もういないのに」

吉田 「悪いと思うなら枝だけ切っついて。それでチャラ！」

辰章 「全部切っちゃいます」

吉田 「やだ。うちのだけでいいわよ。実がなくなるでしょ」

辰章 「枝じゃなくて」

吉田、目を丸くする。

辰章 「遺したもので迷惑かけるのって、おかしいと思うんです」

吉田、黙って辰章を見る。

辰章 「俺たちの時間が削られてるだけじゃないですか」

吉田 「……それは、そうだろうけど」

吉田、柿の木を見る。

吉田 「いいの？」

辰章 「他に時間使いたいんです」

辰章、風斗を見る。

風斗、枝を拾ってはゴミ袋に入れている。

辰章 「俺、冷たいですかね」

吉田、首を振る。

吉田 「いいお父さんになったんだねえ」

吉田、辰章の頭に手を伸ばす。

辰章、少しかがんで、その手を受ける。

吉田 「たっちゃんが生まれた時に植えたって聞いてるよ」

辰章 「父が、俺のために植えたかったみたいで」

吉田 「なら、たっちゃんが決めていいことでしょ」

辰章、顔をあげる。

吉田、笑顔。

風斗の声 「パパー！」

辰章、振り向く。

風斗、柿の木に登っている。

風斗 「すごいー？」

辰章 「おまえ！ 落ちるなよ！」

辰章、木の下に駆けつける。ハラハラした表情。

風斗、枝から枝へ身軽に移る。

柿の実をもぎ、

風斗 「あげる！」

辰章へ投げる。

辰章、受け取る。

吉田、ほほえんで、

吉田 「なつかしいね」

辰章、大きく息を吸い込む。

口元に力が入る。

辰章 「……なつかしいです」

風斗 「ママも干し柿作りのプロになるかなー」

風斗、また柿をもぐ。

辰章、手に力が入る。

6. 勝彦の家・外観（夕）

庭から、機械の駆動音が響いている。

柿の木が、夕暮れの風に揺れている。

7. 辰章の家・リビング（昼）

壁に、風斗が描いた柿の木の絵が増えている。

窓枠には吊るされた干し柿。

8. 勝彦の家・庭（昼）

辰章、落ち葉を集めている。

空を仰ぐ。

青空と柿の木。

木の上には、風斗。

（おわり）